

## 虹

松浦 純子

今年の秋は虹を三回見た。実際はもっと出ていたのだろうが、気が付いたのは三回のみ。いずれも突然にわか雨が降って止んだ後、空に大きな虹が出ていた。

直近では十一月のOBペンの根津から白山界隈散策の時だ。この日は朝から雨が降ったり止んだりではっきりしない天気だった。午後三時半過ぎに白山に着いた途端に天気雨が降った。空を見ると晴れているのに、サーときれいな雨が降り始めた。重たい灰色の雲は見当たらない。どの雲が雨を降らせたのだろうと思いつきながら傘をたたみ、空を見ると大きな虹がはっきりと見えた。

虹は太陽を背にして反対側に見えるというが、私が見たのは夕方だったので、東側に見えたはずだ。家に帰ってから地図でチェックすると、確かに東側だ。次に本当に七色だろうかと観察開始。外側から順に「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫」と確認できる。学校でそう習ったからそう見えたのかもしれないが。

いろいろな気になったのでさらに調べると、古代ではアリストテレス、近代ではデカルト、ニュートンなどそうそうたる科学者が虹を研究している。デカルトは虹が水滴の内部で反射することを発見し、ニュートンは太陽光線がプリズムを通ると屈折率の違いによって多くの色に分けられることを見つけた。光の分散だ。学校で習ったのはこのニュートンの考えだけだったように思う。一六六六年の発見だそうだ。この年はロンドンで大火があった年で、セントポール大聖堂が焼け落ち、町の八割が灰になった。また、ペストが大流行した年でもあり、ニュートンは自らの身の安全を考え、ペストの流行地から避難していた年でもある。

それにしても何と大きな虹なんだろう。虹はみな同じ大きさに見えるのだろうか。白山の虹は以前家から見た虹より随分大きく見えた。虹は円や楕円に見えるそうだ。地球が丸いから？ いや、太陽光線の方向に垂直に張られたスクリーンに投影された円を地上から見ればそうなるかもしれない。しかし、ここで思考は完全にストップ。「虹は美しい」だけで満足できないのが悔しい。